様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月　１５日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究（Ａ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０６８２００５
研究課題名（和文）　シーア派イスラーム社会を中心とした聖地巡礼の比較史的研究

研究課題名（英文）　Comparative History of Pilgrimage and Holy Places in the Shiite Society

研究代表者
守川　知子（MORIKAWA　TOMOKO）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00431297

研究成果の概要（和文）：
本研究は､｢聖地巡礼｣という人類普遍の宗教的営為に焦点をあて､シーア派イスラーム社会、カトリック・キリスト教社会、日本社会の伊勢参詣や四国巡礼を中心に比較検討した。その結果、聖地巡礼には「直線型」と「巡回型」の双方の要素があること、および歴史的にみた巡礼の盛衰には共通点があり、それらは巡礼の対象たる「聖地（巡礼地）」の政治的役割に基づくものであることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
In this research project, I have compared the pilgrimage of the Shi'ite society particularly with those of Catholic society; i.e. pilgrimage to the tomb of St. Jacob in Santiago de Compostela and Sacri Monti (Sacred Mountains) of a re-evocation of Jerusalem in Italy and Poland, and also with pilgrimages of Japanese society; i.e. Shikoku Junrei of 88 temples and Oisemairi for the Ise Grand Shrine. The most important point is on the historical backgrounds of every 'pilgrimage site', which considered as a political factor in each society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総　計	6,000,000	1,800,000	7,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：比較歴史学

１．研究開始当初の背景

イスラーム社会の中でおよそ１割を占めるシーア派は、預言者ムハンマドの娘婿であったアリーをはじめ、その血筋にある 12 人をイマーム（最高指導者）として重視する一派であり、現在ではイランとイラクにその信徒が多数居住している。だが本研究の開始当初には、日本におけるシーア派研究はまだ緒についたばかりであり、書籍や論考の数も限られており、また国際的に見ても、神学・哲学など教義面からの研究、もしくは現代社会の実態を明らかにする、人類学的フィールド・ワーク研究が中心となるなど、その研究動向には偏りが見られた。

そのようななかで、本研究代表者は、一般の人々と信仰との具体的なつながりを明ら

かにしようと試み、シーア派を国教としたサファヴィー朝期（1501-1722 年）以後のイラン地域を中心に研究を進めてきた。

本研究代表者による研究として、イランにおける人々の信仰のスンナ派からシーア派への変容を、イラン国内の聖地マシュハドのシーア派化という具体的な事例に基づいて考察した論考「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド」（『史林』、1997 年）や、信仰形態の一表象である「巡礼（参詣）」に着目し、シーア派においては最重要な宗教的行為として聖地巡礼が行われていること、なかでも、6 人のイマームが眠るイラクのシーア派諸聖地アタバートへの巡礼は、シーア派の人々にとってはメッカ巡礼に匹敵する意義があったことを明らかにした論考「聖地アタバート参詣考」（『東方学報』、2006 年）などが挙げられる。

また、サファヴィー朝期以降シーア派化が進んだイランでは、19 世紀のガージャール朝（1796-1925 年）になると、特にイラクにあるシーア派イマームの墓廟への参詣（アタバート巡礼）が最盛期を迎えることを、拙著『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007 年）において、巡礼の実態のみならず、政治、国際関係、地域社会、近代化等、様々な角度から考察し、論述した（全 10 章構成）。

２．研究の目的

本研究プロジェクトは、研究代表者の上記既発表論考・著作をもとに、これをさらに、他地域の聖地巡礼と比較することで、シーア派イスラーム社会の独自性や、あるいは他の社会との共通性を浮かび上がらせることを目的とする。

具体的には「聖地巡礼」という動態的な宗教的営為を、以下の３つの観点から明らかにする。

（１）シーア派のアタバート（イラク）巡礼に見られるような「越境する」巡礼行為を比較検討する。

これは、「聖地巡礼」の中でも規模の大きいものに焦点をあてることにより、世界史レヴェルでの比較宗教社会史を試みるものである。

（２）イランを中心とするシーア派社会の中での「イマームザーデ（＝イマームの子孫の墓廟）」参詣について、歴史的観点から新たなアプローチを試みる。

これは、各村落や街区といった日常的に触れるところにある小規模な「聖地」に焦点をあて、それらの歴史的な「発展過程」を明らかにすることで、シーア派という１つの宗教社会の中での聖地や巡礼の位置づけを問い直す試みである。

（３）イラン国内最大のシーア派聖地である「レザー廟（Astane-e Qods）」（マシュハド市）を中心に、その寄進財産文書目録である『レザー廟文書集成（*Athar-e Razaviya*）』を校訂・出版する。同書からは、どの程度地理的に広範囲に寄進地や寄進者が広がっているのか、また「聖地巡礼」をおこなう巡礼者の出身地はどこかなど、聖廟の社会的影響力や地政学的分布を量ることが可能となる。これにより、代表的な聖地の社会的役割を解明することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、現地でのフィールド調査と文献調査の双方を通じて知見を深め、比較対象となる聖地巡礼を世界史的規模で幅広く収集する。対象を広く知り、理解することにより、本研究代表者の専門であるシーア派社会の聖地巡礼の特徴が際立つものと考える次第である。

比較対象としては、大規模な聖地巡礼を主たる対象地とする。たとえばキリスト教の中では、聖ヤコブの墓に参るサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼を取り上げ、スペインの辺境にあるこの聖地へ、フランスなどから巡礼者が「越境」して巡礼する諸相をシーア派のアタバート巡礼と比較する。

同様に、日本社会からは、代表的なものであり、研究蓄積も豊富な伊勢参詣や四国八十八箇所巡礼を取り上げる。

このように、「聖地巡礼」という動態的な宗教的営為を、シーア派イスラーム社会を中心としつつ、キリスト教社会や日本社会と比較検討する。

４．研究成果

本研究では、主に、シーア派のアタバート巡礼、カトリック教徒のサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼、および日本の四国八十八箇所巡礼を実際に調査・比較した。その結果、たとえばアタバート巡礼では、イランからイラクへ向かう巡礼者は1000キロの道のりを40日程度かけて徒歩で向かい、全体では３～４ヶ月を要す旅行を行っている。一方、スペイン西端にある聖ヤコブの墓であるサンティアゴ巡礼では、巡礼者は、ピレネー山麓の「スタート地点」であるサン・ジャン・ピエ・ド・ポーから800キロの道のりを40日かけて聖地を目指す。同様に、四国巡礼も全行程1300キロを40日強かけて踏破する。ちなみにイスラーム社会のメッカ巡礼も、歴史的には40日程度の距離の都市（ダマスクスやバグダード）に、巡礼者が集まるポイントが設けられていた。このように、世界各地の大規模な巡礼では、宗派は異なれども、時間や距離といった物理的な要因はほぼ共通することが明らかとなる。

三者とも巡礼にかかる日数や距離、巡礼者の規模などは同じであり、共通性がある一方で、アタバート巡礼やサンティアゴ巡礼は「直線型」の巡礼であり、「往路」と「最終目的地（聖廟）」に圧倒的な重点が置かれるのに対し、四国巡礼の場合はすべてを巡るまでの巡礼全体の「途上」が重視され、個々の「目的地（札所）」の重要性が相対的に低い、という点は大きな違いである。この点は、伊勢参詣の方が、アタバートやサンティアゴ巡礼との共通性が高い。もっとも、四国の場合も、四国に行くまでは「直線型」の要素を持ち合わせている。

また興味深い点として、大規模な巡礼になるほど巡礼者を飽きさせない工夫というものが、いずれの聖地巡礼においても、その歴史的展開の中で繰り広げられていることが挙げられる。

たとえばサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼では、数年おきに設定される「聖ヤコブの年（聖年）」というものがあり、この年には巡礼者が大幅に増えるとされる。また四国巡礼においても、４年に一度のうるう年には、お遍路の創始者とされる衛門三郎にならった「逆打ち」が奨励される。

このような巡礼者を「飽きさせない工夫」というのは、いずれも現代的な、あるいは観光業とも一体化したものとも考えることができよう。

一方、このような「特別」なケースを想定する巡礼は、イスラーム社会には見られない。イスラーム社会ではメッカ巡礼であれ、アタバート巡礼であれ、「特別な年」や「特別な日」といった設定は見られず、巡礼者の増減はあくまでも政治的な状況に左右されるにすぎない。この点は、おそらくキリスト教社会であれば、イェルサレム巡礼に相当するのであろう。だが今回は、イェルサレム巡礼については比較対象としなかったので、この点については今後の課題としたい。

また、調査の結果、サクリ・モンティ（聖なる山）信仰への知見を深めたことは大きな成果である。サクリ・モンティは、15-16世紀にかけてイタリア北部のピエモント州につくられた「聖地」であり、イェルサレムのゴルゴダの丘やイエスやマリア、聖人フランチェスコの生涯を、20～30のあずまやをめぐって再現するものである。これと同様のものがポーランドのカルヴァリア・ゼブジドフスカにもあり、17世紀に地元領主によってつくられたここもまた、「巡礼公園」としてポーランドの人々を巡礼者として集めている。

このサクリ・モンティ巡礼は、当時の政治状況などを背景に、イェルサレム巡礼を為し得ない環境の中、地元志向でつくられたものと考えられ、「うつし」巡礼の１種とみなすことができよう。この点は、シーア派社会に広く見られる「イマームザーデ」詣でと同様であり、イマームの子孫の墓として認識される「イマームザーデ」を、「うつし」のひとつの類型とみなす視点を与えてくれた。

既述した聖地巡礼の「直線型」「巡回型」の様式は、「巡礼」の動態的側面からみた結果であるが、その背景には、「目的地」となる聖地・聖所の特性や成り立ちに遠因があると考えられる。加えて、イマームザーデのような小規模な、もしくはサクリ・モンティのようなミニチュア版の聖地および巡礼（参詣）は、その成り立ちは明らかに政治的な要因に基づいている。

「聖地」の「生成過程」に基づくこのような特性の相違は、本研究期間内に各地の巡礼地を調査・研究した際に浮かび上がってきた点であり、結果、「聖地はつくりだされるものである」という時代背景に鑑みた観点の重要性を再認識するに至った。現在、その成果として、各地の聖地・聖所を対象に、歴史的な「成立」背景の解明を中心に、『聖地の世界史――創造される祈りの空間』（仮）として執筆中である。

イラン最大の巡礼地であるシーア派聖廟アースターネ・ゴドゥスの寄進財産目録の英文校訂の刊行作業が進行中で、来年度には東洋文庫から刊行される予定である。

次項目の「発表論文等」に挙げた以外の研究成果としては、「シーア派イスラームの聖地巡礼」（『歴史と地理』649、山川出版社、2011/11）を研究動向として執筆し、また『世界地名大事典』（朝倉書店、2012年刊行予定）の「マシュハド」や「ゴム」といった巡礼地（聖地）項目の執筆がある。さらに、イラン研究の「権威」である*Encyclopaedia Iranica* (Columbia University)から、”Pilgrimage”の事典項目執筆を依頼されており、現在執筆中である。

研究期間中の2010年1月には、北海道大学にて、「シーア派社会と聖地・聖廟――歴史学の視点から」と題したシンポジウムを企画・開催した（北海道大学大学院文学研究科より公募の助成を受ける）。同シンポジウムでは、山岸智子氏（明治大学）の基調講演「シーア派の社会と宗教実践」のほか、本研究代表者が「ペルシア語旅行記にみるイマーム廟とイラン社会」について報告し、さらに木村暁氏（日本学術振興会特別研究員・東京大学）の「マンギト朝ブハラにおけるシーア派コミュニ

ティーの顕在化」、杉山隆一氏（慶應義塾大学大学院）の「18世紀におけるイマーム・レザー廟」、近藤信彰氏（東京外国語大学）の「シャー・アブドル＝アズィーム廟の歴史とワクフ」という４本の研究報告、および東京大学の大稔哲也氏によるコメント・総合討論を設けた。当日は全国から40名以上の研究者が参加し、活発な議論が繰り広げられ、この分野への関心の高さが窺われた。

最後に、サファヴィー朝期イランのシーア派信仰の根幹にかかわる学術論文（「バイエルン州立図書館所蔵Cod.pers.431写本をめぐって」『東方学』、2009年）においては、2010年に東方学会賞を受賞したことを付言する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Morikawa, Tomoko, “Pilgrimage to the Iraqi *‘Atabat* from Qajar Iran”, *Journal of Shia Islamic Studies*, (査読有), 2012（forthcoming in July）.
② 守川知子「「イラン史」の誕生」『歴史学研究』（査読有）863、2010、12－21 頁。
③ 守川知子「バイエルン州立図書館所蔵 Cod.pers.431 写本をめぐって――書写奥書署名 Ismāʿīl b. Ḥaydar al-Ḥusaynī とは誰か？」『東方学』（査読有）117、2009、176－157 頁。

〔学会発表〕（計１０件）

① Morikawa, Tomoko, “Shah Isma’il and the unknown manuscript”, European Conference of Iranian Studies, Jagiellonski University, Krakow (Poland), 2011/09/07.
② 守川知子「地中海を旅した二人の改宗者――イラン人カトリック信徒とアルメニア人シーア派ムスリム」「前近代の地中海世界における旅をめぐる知的営為と記述」研究会、慶應義塾大学三田キャンパス、東京都港区、2011/11/12.
③ 守川知子「神と人をつなぐ場へ――シーア派ムスリムの聖地巡礼」2010 年度後期・日本イスラム協会公開講演会、東京大学法文 2 号館、東京都文京区、2010/11/23.
④ 守川知子「シャー・イスマーイールとサファヴィー朝初期のシーア派信仰」東方学会総会、芝蘭会館、京都、2010/11/06.
⑤ Morikawa, Tomoko, ““Ziyara” and “Ziyaratgah” in 19th century Iran” The Eighth Biennial Conference of Iranian Studies, DoubleTree Guest Suites, Santa Monica (USA), 2010/05/28.
⑥ Morikawa, Tomoko, “Pilgrimage to the Iraqi ‘Atabat from Qajar Iran”, Sunni-Shii Mausoleums and Saint Veneration in Iraq and Neighbouring Countries, University of St. Andrews, Scotland (UK), 2010/04/12.
⑦ 守川知子「ペルシア語旅行記にみるイマーム廟とイラン社会」、「シーア派社会と聖地・聖廟――歴史学の視点から」、北海道大学、札幌市、2010/01/30.
⑧ Morikawa, Tomoko, “Pilgrimage of the Dead -- 'Transfer of Corpses' to the 'Atabat from Qajar Iran”, Dialogue on Death and Life: Views from Egypt, Bibliotheca Alexandrina, Alexandria (Egypt), 2009/10/03.
⑨ 守川知子「「イラン史」の誕生」、歴史学研究会総合部会 2008 年度第３回例会、東京大学、東京都文京区、2009/03/28.
⑩ Morikawa, Tomoko, “Pilgrims and Immigration Procedures at the Iran-Iraq Border in the Latter Half of the 19th Century”, The Seventh Biennial Conference of Iranian Studies, Toronto University (Canada), 2008/08/02.

〔図書〕（計３件）

① 守川知子「ペルシア・イラン世界における翻訳文化――インド・ギリシア、アラブ、そして西洋諸語から」近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』東京外国語大学、2011、157-170 頁.
② 守川知子・稲葉穣『伝ウマル・ハイヤーム著　ノウルーズの書』京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター、2011、全 160 頁.
③ 守川知子「ナジャフ」「カルバラー」『世界地理講座　西アジア』、立川武蔵・安田喜憲監修、朝倉書店、2010、123-124 頁.

〔その他〕
守川知子「そうだ、聖地へ行こう――巡礼にみるイスラーム・シーア派」（北大人文学カフェ）、紀伊國屋書店札幌本店、札幌市、2012/01/29.

ホームページ等
http://ocw.hokudai.ac.jp/OpenLecture/HumanitiesCafe/2011/IslamicHolyLand/

６．研究組織
(1)研究代表者
守川　知子（Morikawa Tomoko）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00431297

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：